

## 聖書と千島・森下学説

### 第1回 イエスの「生ける水」と千島・森下学説 — 霊と肉体を潤す二重の命

私たちが聖書を読むとき、そこに記された言葉は単なる比喻ではなく、霊と肉体の両面に深く関わる真理を語っていることに気づかされます。その代表的なものの一つが、イエスが語られた「生ける水」の言葉です。

ヨハネの福音書 7 章 38 節において、イエスはこう語られました。

「わたしを信じる者は、その人の腹から、生ける水が川となって流れ出るであろう。」

伝統的には、この「生ける水」は聖霊を意味すると解釈されてきました。しかし近代になって「千島・森下学説」が唱える腸造血説や赤血球分化説と照らし合わせて読むと、驚くほど深い対応関係が見えてきます。イエスの言葉は霊的な比喻にとどまらず、人間の肉体に備えられた生命の仕組みにも符合しているのです。

#### 1. 血は命であるという聖書の原則

レビ記 17 章 11 節には、「肉の命は血にある」と明記されています。旧約聖書全体を通じて、血は単なる体液ではなく命そのものとされ、流すことは重大な意味を持ちました。

新約においてもイエスは「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ命はない」（ヨハネ 6 章 53 節）と語られました。ここでも血は命そのもの、命を受け継ぐ媒介であると強調されています。

聖書における命観の中心は、まさに「血＝命」という理解にあります。

#### 2. 「腹から流れ出る生ける水」と腸造血説

では、イエスの語られた「生ける水」が腹から流れ出るとはどういう意味でしょうか。ここに千島・森下学説の第一の柱、腸造血説が大きく関わります。

従来の医学は血液の主な造血の場を骨髄と見なしてきました。しかし千島学説は血液の主な産生の場は骨髄ではなく腸管にあると主張します。すなわち、人の命の源である血は腹部の深いところから生み出され、全身へと送り出されているというのです。

この視点に立つと、イエスの言葉は驚くほど具体的な意味を帯びてきます。生ける水＝命の血は、まさに「腹」すなわち腸から流れ出て全身を潤し、命を保つ

ている——この仕組みを象徴的に示しているように見えるのです。

なお、ヨハネ7章38節の「腹」に相当するギリシア語原文は「コイリア (κοιλια)」であり、腹部・腸・胎といった内臓全般を指す言葉です。聖書の原語が「腸の部分」を含意していることは、腸造血説との対応を考える上で注目に値します。

### 3. 聖霊としての生ける水

もちろん、伝統的な解釈において「生ける水」は聖霊を意味します。サマリヤの女との対話（ヨハネ4章）では、イエスは「わたしが与える水を飲む者は決して渇くことがない」と語られました。

これは、人間の魂が聖霊によって潤され、永遠の命へと導かれることを意味します。肉体の渇きを癒やす水ではなく、霊的な渇きを癒やす水。干上がった魂に命を与える水こそ、イエスが与えられる「生ける水」です。

### 4. 二重の意味の統合

ここで注目すべきは、霊的な水と肉体的な水が二重に重なっていることです。

肉体の側では、腸から造られる血が全身に流れて命を支える。霊の側では、聖霊が心を潤し、魂を新たにします。どちらも「腹」から流れ出し、全体を生かす命の源泉です。イエスの言葉は、単なる象徴ではなく、人間存在の二重構造を見事に貫いているのです。

この重なりは、ヨハネ第一の手紙5章6～8節にも通じるものがあります。

「あかしをするものが三つある。御霊と水と血とである。そして、この三つのものは一致する。」

御霊と水と血が一致する——ここには霊的な働きと肉体的な働きが矛盾せず、むしろ補い合っているという聖書的命観が示されています。

### 5. 結論 — 生ける水は霊と肉体を潤す

イエスの語られた「生ける水」は、聖霊による霊的命と、血液による肉体的命とを同時に示しています。千島・森下学説は「血は腸から生み出される」と主張しますが、これは「その人の腹から生ける水が流れ出る」というイエスの言葉と実に符合します。

聖書の言葉と現代の学説とが重なり合うとき、私たちは神の言葉の先見性を改めて知ることができます。霊と肉体をともに潤す「二重の命」の流れこそ、イエスが約束された「生ける水」の実体なのです。

## 第2回 血は命 — 赤血球分化説と聖書の命観

千島・森下学説の三本柱のひとつに「赤血球分化説」があります。これは「赤血球こそがすべての体細胞の母体である」という大胆な主張です。通常の医学では、赤血球は酸素を運ぶ働きに限定され、細胞のもとになるとは考えられてきませんでした。しかし千島喜久男博士は、赤血球が分化して筋肉や神経、骨や臓器の細胞を形づくっていくと提唱しました。主流医学はこの説を認めていませんが、千島学説の立場では、血こそが体を造る「命の根源」であることとなります。

この視点で聖書を読むと、古代から受け継がれてきた命観と驚くほど符合するのです。

### 1. 聖書における「血=命」

レビ記 17 章 11 節はこう語ります。

「肉の命は血にある。それは命として祭壇の上で贖いをするために、あなたがたに与えたのである。」

ここでは血そのものが命と同一視されています。血は単なる体液ではなく、肉体を生かし、神と人との契約をつなぐ最も聖なるものです。だからこそ旧約の律法では血を食べることが厳しく禁じられていました。血を口にすることは、命を自分の所有物にしてしまうことに等しいからです。

イエスもまた、この命観をさらに深められました。ヨハネ 6 章 53 節でこう語られています。

「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに命はない。」

血を飲むことは、命を受け継ぐこと。イエスの血はすべての人に新しい命をもたらす源なのです。

### 2. 赤血球が体を造るという学説

千島学説によれば、血液中の赤血球が必要に応じて分化し、筋肉細胞や神経細胞、骨細胞などに変わるとされます。つまり血がなければ体の組織はつくられず、すべての細胞の母体は赤血球にあるというのです。

この説を聖書に重ね合わせると、「血が命である」という理解は単なる比喻ではなく、生命現象の根本を突いていることとなります。血がなければ命はなく、逆に血からすべての命が形づくられる——聖書はその本質を古代から語っていたと見ることができます。

### 3. 土のちりと息と血

創世記 2 章 7 節には、人間創造の場面が描かれています。

「主なる神は土のちりで人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。こうして人は生きる者となった。」

土のちりは体の素材、息は生命のエネルギー。創世記はその中間要素を明示してはいませんが、聖書全体が「血は命」と繰り返し証言していることを踏まえれば、土から造られた肉体と、神から吹き込まれた息の命とを結ぶ媒介として、血を位置づけることは聖書的に自然な解釈です。

ちり=物質、息=霊、そしてその両者を結ぶ血=命。聖書の三重構造と学説の理解が対応するのです。

### 4. 聖書の「命」と現代の生命科学

聖書は繰り返し「血は命」と語りますが、それを抽象的な比喻にとどめる必要はありません。むしろ、血液の働きを探求する現代科学がようやく追いつきつつあると見ることもできます。

赤血球が単なる酸素運搬装置ではなく、細胞の母体であるならば、私たちの体は「血から造られた存在」であり、血を通して生きている存在です。だからこそイエスは、ご自身の血を「永遠の命を与えるもの」として示されたのでしょう。

### 5. 結論 — 血こそ命の普遍的源

赤血球分化説は、血が命そのものであるという聖書のメッセージを科学的に裏打ちするように思えます。血からすべての細胞が生まれ、血によって命が保たれる。聖書が古代から語ってきた真理は、現代においても新しい光を放っています。

イエスの血は、ただ霊的な救いの象徴ではなく、命を生み出し続ける根源そのものです。血を通して肉体も霊も養われる——これが、聖書と千島・森下学説が一致して示している命の奥義なのです。

## 第3回 断食と細胞可逆説 — 更新される命

千島・森下学説の第三の柱に「細胞可逆説」があります。これは「断食や飢餓のとき、体の細胞が赤血球へと逆戻りし、そこから再び新しい細胞がつくられる」という主張です。通常の医学では、分化した細胞は不可逆的であるとされますが、千島学説はそれを覆し、細胞が可逆的に変化できると説きました。

もしこれが真実であれば、人間の体は「飢えや断食」を通してリセットされ、刷新される仕組みを持っていることになります。そして、この視点は聖書の語る断食の意味と驚くほどよく符合するのです。

### 1. 聖書における断食の意味

旧約聖書では、イスラエルの民が悔い改めや祈りを伴って断食を行った記録が数多くあります。イザヤ 58 章 6 節では、神が望まれる断食の真意が語られています。

「わたしの選ぶ断食は、悪のなわを解き、結び目をほどもき、しいたげられた者を自由にし、すべてのくびきを折ることではないか。」

断食は単なる食事制限ではなく、魂を解放し、神との関係を新しくする手段でした。

新約聖書でもイエスご自身が荒野で 40 日間の断食を行い、試みを克服されたことが記されています（マタイ 4 章）。断食は神への従順と刷新のしるしだったのです。

断食は新約のイエスに限りません。モーセも二度にわたって四十日四十夜の断食をして神の戒めを受けました（出エジプト記 34 章 28 節）。預言者エリヤもまた、四十日四十夜の旅を断食で歩み通しました（列王記上 19 章 8 節）。聖書全体を通じて、四十日の断食は霊的な突破口を開くための刷新の手段として繰り返し登場するのです。

### 2. 細胞可逆説と断食の身体的刷新

千島学説によれば、飢餓や断食の際、体の細胞は赤血球に逆戻りします。赤血球は全細胞の母体ですから、そこから新しい細胞が再び生み出される。つまり断食によって体は「古い自分」から「新しい自分」へと作り直されるのです。

現代でも断食療法やファスティングが注目されているのは、断食が体の代謝を変化させ、細胞内の古いタンパク質や損傷した成分を除去するオートファジー（自食）現象と関わりとされているからです。主流医学でも認められたこのオートファジーの働きは、千島学説の細胞可逆説とは枠組みが異なりますが、「断食が体の刷新をもたらす」という方向性においては一致しています。

### 3. 「新しくされる」聖書の約束

聖書は繰り返し「新しくされる」というテーマを語ります。

コリント第二 5 章 17 節 「だれでもキリストにあるなら、その人は新しく造られた者である。」

イザヤ 40 章 31 節 「主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼を張って上る。」

断食を通じて体がリニューアルされることと、霊的に新しくされることは、まったく同じ構造を持っています。断食 = 肉体のリセット。悔い改め = 霊のリセット。どちらも古いものを壊して血に還し、そこから新しい命を受け取るという可逆的な働きなのです。

### 4. イエスの断食と十字架

イエスご自身も荒野での断食を通じて試みを超えられました。それは単なる体験ではなく、人類の「古い命」を脱ぎ捨て、「新しい命」を与える準備でした。

最終的にイエスの血は十字架で流され、すべての人に新しい命を与える贖いとなりました。血が命を再生させるという千島学説の視点から見れば、イエスの流された血は、全人類のための「究極の可逆的刷新」を意味していると受け取ることできるでしょう。

### 5. 結論 — 断食は霊と肉体を新しくする

細胞可逆説は、断食を通して体が赤血球に戻り、そこから新しい細胞を生み出す仕組みを明らかにしました。聖書は断食を通じて魂が新しくされると語りません。

肉体的リニューアルと霊的リニューアルは別のものではなく、同じ原理の二つの現れです。血によって古いものは壊され、新しい命が造られる。

だから、イエスが「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」と語られたのは、単に精神的な励ましではなく、命そのものを更新する真理を示していたのです。

断食は、体と魂をともに新しくする神の方法。千島・森下学説は、その肉体的側面を科学の言葉で明らかにしたに過ぎません。霊と肉体が一つに新しくされる——そこに神の創造の奥義があるのです。

## 第4回 御霊・水・血の一致と生命循環

千島・森下学説の核心は「赤血球が万能細胞として働く」という点にあります。赤血球は単なる酸素運搬のための細胞ではなく、全身のあらゆる組織の母体となり得る存在です。必要に応じて筋肉や神経、骨や臓器の細胞へと分化していき、場合によっては再び赤血球へと戻ることさえ可能である——この可逆的な循環こそが命を支える仕組みだとされます。

聖書にも、この学説と符合する表現があります。それがヨハネ第一の手紙5章6～8節です。

「このイエス・キリストは、水と血とをとおってこられたかたである。水によるだけではなく、水と血とによってこられたのである。そのあかしをするものは、御霊である。御霊は真理だからである。あかしをするものが、三つある。御霊と水と血とである。そして、この三つのものは一致する。」

この箇所は、イエスの受肉の实在性を否定するグノーシス主義的な霊肉二元論に対して、血（十字架の死）と水（洗礼）の両方が実際に起きた出来事であると証しする文脈で書かれています。つまりここで聖書は、霊と物質の対立ではなく、両者の統合と一致を宣言しているのです。

ここに登場する「御霊」「水」「血」の三つの証しは、単なる象徴ではなく、命の循環そのものを示唆しているのではないのでしょうか。

### 1. 聖書が語る三つの証し

この聖句は、初代教会から神学的に非常に重視されてきました。「血」＝イエスが十字架で流された血。命そのもの。「水」＝洗礼の水。新しい命の出発。「御霊」＝聖霊。神の息吹としての命。三つはそれぞれ別々のものに見えながら、実際には一体となって命の証しをなす。霊的な救いの核心がここに語られています。

### 2. 千島学説から見る命の構造

千島・森下学説は、生命の中心に「血」、特に赤血球を据えます。「血」＝赤血球。万能細胞として全身のあらゆる細胞に分化する。この点が学説の核心です。

一方で、血液や細胞は水分を基盤として存在しており、体液環境がなければその働きは成り立ちません。また、細胞の分化や可逆的変化には、何らかの秩序だった働きが関与していると考えられます。こうした点を踏まえると、「水」＝体液の基盤、「秩序（働き）」＝生命の変化を導く原理、という二つの側面を補助的に考えることができます。

さらにこれを神学的に見るならば、この「秩序の原理」は聖書における「御霊」と対応づけて理解することも可能です。森下敬一博士が強調した「気」や生命場の概念が、細胞の分化や可逆性の方向を導くとされます。

こうして、血・水・秩序（働き）という三つの側面が、千島・森下学説における命の構造を支えていると見ることができます。これら三つが循環的に働くことによって、生命は維持され、絶えず刷新されていきます。

### 3. 御霊と水と血の一致 — 学説と聖書の交差点

聖書は「御霊と水と血は一致する」と語り、千島学説は「赤血球（万能細胞）・水・秩序は循環する」と説きます。言葉は異なりますが、どちらも「命は三つの要素が一体となって流れ、更新されていく」という真理を示しています。

特に注目すべきは、聖書が「血＝命」と語りつつ、それを「水」と切り離さずに語る点です。水がなければ血は存在せず、血がなければ水は命を保てない。そして両者を導き、秩序づける「御霊」という原理がある。これはまさに生命循環の三位一体の姿です。

### 4. 命の循環と霊的刷新

千島・森下学説は、腸造血説・赤血球分化説・細胞可逆説という三本柱を通して「命は循環する」ことを示しています。

聖書もまた、救いと復活を「古い自分が死に、新しい命に生まれ変わる」循環として描いています。ローマ6章4節にはこう記されています。

「私たちはバプテスマによって、キリストとともに死に葬られた。それは、キリストが死者の中からよみがえられたように、私たちも新しい命に歩むためである。」

肉体の命も霊の命も、古いものが壊れて血に還り、そこから新しい命が生まれ出る。この可逆的循環が命の奥義なのです。

### 5. 結論 — 三つは一致して命を証しする

御霊と水と血の一致という聖書の言葉は、命が単独ではなく三つの力によって支えられることを示しています。そして千島・森下学説もまた、赤血球＝万能細胞、水、秩序（働き）の三つが命の基盤を成すことを示しています。

霊的刷新と肉体的刷新は分離されたものではなく、同じ原理の両側面です。御霊と水と血が一体となって命を証しする——それは神の創造に込められた秩序の証拠であり、聖書と科学が符合する場所なのです。

## 第5回 血のしるしと新しい命 — 出エジプトから贖いへ

旧約聖書の中で、血が象徴的に用いられる最も劇的な場面のひとつが出エジプト記の「過越祭」です。エジプトで奴隷とされていたイスラエルの民が解放される前夜、神は彼らに小羊をほふり、その血を家のかもと門柱に塗るよう命じられました。血のしるしを見たとき、滅びをもたらす災いはその家を過ぎ越す、と告げられたのです（出エジプト記 12 章）。

この出来事は単なる歴史的イベントではなく、血が命を守り、新しい共同体を生み出す根源的な象徴となりました。そしてこの視点を、千島・森下学説の「赤血球 = 万能細胞」という理解と重ね合わせると、血が命を生み出す仕組みそのものを深く理解する手がかりとなります。

### 1. 血のしるしは命のしるし

過越祭の夜、血が家の入り口を守るしるしとなりました。血がなければその家には災いが臨み、血が塗られていれば命が守られました。

レビ記 17 章 11 節の「肉の命は血にある」という言葉がここでも響きます。血は単なる体液ではなく、命そのものの象徴です。血を通して神と人との契約が結ばれ、共同体が存続するのです。

### 2. 赤血球 = 万能細胞と共同体の誕生

千島・森下学説は、赤血球を万能細胞ととらえます。赤血球は全身のあらゆる細胞に分化する母体であり、必要に応じて再び赤血球に戻る可逆性を持っています。つまり、血は「命を生み出し続ける源泉」です。

過越祭の血が新しいイスラエル共同体の誕生を守ったように、赤血球は新しい細胞を絶えず生み出し、体を保ち続けます。血は単なる維持のためのものではなく、新しい命を生み出す力を持っているのです。

### 3. イエスの血による新しい契約

実はこの対応は、聖書自身が明示しています。パウロはコリント第一 5 章 7 節で「わたしたちの過越の小羊キリストは、すでにほふられたのである」と明言しています。過越の小羊の血がイスラエルを守ったように、キリストの血がすべての人を救う——この対応は著者の読み込みではなく、聖書そのものが語っていることなのです。

新約聖書に入ると、この過越祭の出来事はイエスの十字架によって成就します。最後の晩餐でイエスは杯をとり、弟子たちにこう言われました（マタイ 26 章 28 節）。

「これは、多くの人のために流す、わたしの契約の血である。」

小羊の血がイスラエルを救ったように、イエスの血は全人類を罪から救う契約の血となりました。ここでも血は命を新しく生み出す原理として働いています。千島学説的に言えば、赤血球＝万能細胞が新しい細胞を生み出すように、イエスの血は新しい命の共同体を生み出す源泉となったのです。

#### 4. 血がつながる刷新の循環

出エジプトの過越祭 → イエスの十字架 → 信じる者に与えられる新しい命。この流れは「血による命の更新」の歴史的展開です。そしてこれは細胞レベルでも同じ構造を持っています。

古い細胞は血に戻り（可逆性）、赤血球から新しい細胞が生まれる（分化性）、腸から新たな血が造られる（造血性）。血の循環は、肉体の更新と霊的刷新の両面で働いているのです。

#### 5. 結論 — 血は命を守り、新しい命を生み出す

過越祭の血のしるしは、命を守り、新しい民を誕生させました。イエスの血は、すべての人に新しい命を与える契約となりました。千島・森下学説においても、赤血球は万能細胞として全身の命をつくり続けています。

血は命を守るだけでなく、新しい命を絶えず生み出す源泉です。だからこそ聖書は「血は命である」と繰り返し語るのです。霊的にも肉体的にも、血は命を生み出す神秘的な働きを担っている——それが出エジプトの出来事とキリストの贖い、そして生命科学の視点から見えてくる一致なのです。

## 第6回 普遍の救いと血の循環

聖書は「イエスの血によってすべての人が救われる」と語ります。その血は特定の民族や限られた人々のためのものではなく、万人のために流されました。一方、千島・森下学説は「赤血球は万能細胞であり、全身を生み出し、更新し続ける源泉である」と主張します。この二つの理解を重ね合わせると、血が持つ普遍性と循環性が浮かび上がってきます。

### 1. イエスの血は万人のために

新約聖書の中心的なメッセージは、イエスの血がすべての人の救いのために流されたということです。

ヨハネ第一の手紙 1章7節 「御子イエスの血が、すべての罪から私たちを清める。」

ヘブル 9章12節 「山羊や子牛の血によらず、ご自身の血によって、ただ一度、聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられた。」

ここで強調されるのは、イエスの血が時代や民族を超えて、普遍的にすべての人に及ぶということです。血は人を区別せず、命を与える原理そのものとして働きます。

### 2. 赤血球 = 万能細胞の普遍性

千島・森下学説によれば、赤血球は体のすべての細胞に分化する母体です。筋肉も神経も骨も臓器も、赤血球が変化して生まれていきます。そして必要に応じて再び赤血球に戻ることができる——これが細胞可逆説の基盤でもあります。

つまり赤血球は、体のすべてを養い、更新する「普遍的な命の源」です。特定の器官だけではなく、全身に働きかける存在。それは、イエスの血がすべての人に及ぶという普遍性と深く照応しています。

### 3. 血の循環と命の更新

血液は全身を巡り、酸素や栄養を供給し、不要なものを運び去ります。この循環が止まれば命は保てません。千島学説の視点を加えるなら、血は単なる運搬役ではなく、新しい細胞を生み出し、古い細胞を赤血球に戻す「更新の循環」を担っています。

腸で新しい血がつくられる（腸造血説）。赤血球が細胞に分化する（赤血球分化説）。細胞が赤血球に戻る（細胞可逆説）。この三段階の循環があるからこそ、肉体は絶えずリフレッシュされ、寿命を全うできるのです。

主流医学の観点からも、細胞内の古い成分が分解・再利用されるオートファジーや、一部の組織における幹細胞による再生など、体が自己更新する仕組みが明らかになってきています。千島学説が提唱する赤血球を起点とする循環的更新は、このような生命の自己更新という方向性において、主流科学とも一定の共鳴点を持っています。

#### 4. 救いの普遍性と血の循環

聖書が語る「血の普遍性」と千島学説が語る「血の循環性」は、一つの真理を二つの角度から表現しているように思えます。霊的次元では、イエスの血がすべての人を救う。肉体的次元では、赤血球が全身を更新する。どちらも「血が全体を覆い、区別なく命を与える」という普遍的な原理を示しています。

イエスの血が民族を超えて人類を贖ったように、赤血球は臓器や器官を超えて体全体を支えます。血は分け隔てなく、全体に命を行き渡らせるのです。

#### 5. 命は常に新しくされる

血の循環の驚きは、それが「一度きりの出来事」ではなく、日々繰り返される更新であることです。古い細胞が壊れて血に戻り、そこから新しい細胞が生まれる。このプロセスによって体は絶えず若返り、命を維持しています。

同じように、救いもまた「一度の経験」で終わるものではありません。信じる者は日々、イエスの血によって清められ、新しい命に歩むよう招かれています。

コリント第二 4 章 16 節 「私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされている。」

肉体と霊の双方において、「血による更新」は日々続いているのです。

#### 6. 結論 — 血は普遍的に命を与える

イエスの血は万人のために流され、すべての人に救いをもたらしました。赤血球は万能細胞として全身を更新し、すべての細胞に命を与えます。霊的救いの普遍性と、肉体の血液循環の普遍性。この二つは矛盾せず、むしろ互いを映し合っています。

血はすべてを生かし、すべてを新しくする——それが聖書と千島・森下学説が共に示す命の奥義です。

## 第7回 終末と細胞可逆 — 朽ちない体への転換

聖書は「終末において人は朽ちない体に変えられる」と語ります。パウロはコリント第一 15 章で、復活の体について次のように述べました。

「この朽ちるべきものは必ず朽ちないものを着、死ぬべきものは必ず不死を着る」（コリント第一 15 章 53 節）

人間は肉体の死を免れません。しかし終末には、新しい命を受け、朽ちることのない体に変えられるというのです。この「変化」の奥義を、千島・森下学説の「細胞可逆説」に重ね合わせてみると、霊的真理と生命現象が符合していることが見えてきます。

### 1. 細胞可逆説 — 命のリセット

千島・森下学説によれば、赤血球は万能細胞としてあらゆる細胞に分化します。そして断食や飢餓の状態では、逆に分化した細胞が赤血球へと戻ることができるとされます。これが「細胞可逆説」です。

つまり、生命体は「古い細胞を赤血球に戻し、そこから再び新しい細胞を生み出す」というリセットの仕組みを持っています。このプロセスが繰り返されることで、体は部分的に更新され、老化や損傷から回復する可能性を持つのです。

### 2. 聖書における「新しい体」

聖書は復活の体を「朽ちない体」と表現します。パウロはこう言います。

「まかれるときは朽ちるものであっても、よみがえるときは朽ちないものである」（コリント第一 15 章 42 節）

「自然のからだでまかれて、霊のからだによみがえる」（同 15 章 44 節）

ここでは、古い体が壊れ、新しい質の体に造り替えられるというビジョンが描かれています。細胞可逆説の視点から見ると、この「古い体から新しい体へ」という転換は、細胞レベルでも起こり得る現象の延長線上にあると考えられます。

### 3. 可逆性と復活の希望

千島学説が示す可逆性は、生命が「やり直しの可能性」を持っていることを教えます。分化した細胞が一度壊れても、赤血球に戻れば新しい細胞に生まれ変わることができる。これは生命の根本的な希望です。

聖書の復活の約束もまた、人間の存在が「やり直しの可能性」を持つことを告げています。死で終わるのではなく、新しい命に造り替えられる——まさに神による究極の可逆性です。

## 4. 断食・死・復活の相似

断食によって細胞が赤血球に戻り、そこから新しい細胞が生まれるように、死によって古い体が壊れ、神によって新しい体に変えられる。この相似は非常に示唆的です。断食は肉体的・霊的リセットの象徴であり、死と復活の予告とも言えるでしょう。イエスご自身も断食の後に公生涯を開始し、十字架の死の後に復活されました。

自然界にも同様の相似が見られます。種は土に落ちて殻が壊れることで初めて芽吹き、冬眠する動物は代謝を極限まで落としてリセットされ、春に再び活動を始めます。パウロ自身も「まかれる種」の比喻を用いて復活の体を語っています（コリント第一 15 章 37 節）。聖書・自然・千島学説の三つが、同じ「壊れて新しくなる」という原理を指し示しているのです。

千島学説が解明する可逆的プロセスは、聖書が語る死と復活の奥義を自然界に刻まれたサインとして映し出しているのです。

## 5. 朽ちない体への転換

科学的には、赤血球の万能性と細胞可逆性は「肉体の再生能力」を指します。霊的には、イエスの復活と終末の約束は「存在の刷新」を指します。両者を重ねると、次のようなビジョンが見えてきます。今の体は古い、やがて壊れる。しかし血（赤血球）の可逆性により、体は部分的に新しくされ続ける。終末には、神によって完全なリセットが起こり、朽ちない体を与えられる。肉体と霊の両面で「古いものが壊れ、新しいものが造られる」という同じ原理が働いているのです。

## 6. 結論 — 細胞可逆と復活の福音

細胞可逆説は、生命が自らを刷新する可逆性を持っていることを示しました。聖書は、人間存在そのものが死を超えて新しくされると語ります。赤血球＝万能細胞の可逆性は、霊的復活の予告のように見えます。肉体も霊も、古いものが壊れ、新しい命に変えられる。これこそ神の創造の奥義であり、終末に与えられる「朽ちない体」への希望なのです。

## 第8回 千島・森下学説に見る聖書の先見性 — 総まとめ

これまでの連載では、聖書に記された「血」「水」「霊」に関する表現と、千島・森下学説の三本柱（腸造血説・赤血球分化説・細胞可逆説）を照らし合わせてきました。驚くべきことに、古代の聖書の言葉と近代以降に提唱された学説が、呼応するように同じ命の真理を指し示していることが見えてきました。

最終回では、これまでのポイントを総括しつつ、「聖書の先見性」という視点から全体を振り返ってみたいと思います。

### 1. 腸造血説と「腹から流れ出る生ける水」

ヨハネ7章38節でイエスは言われました。

「わたしを信じる者は、その人の腹から、生ける水が川となって流れ出るであろう。」

伝統的には聖霊を象徴する言葉とされてきましたが、「血＝命」と読むなら、生ける水は血液を指すとも解釈できます。千島学説の腸造血説——血は腸から造られる——に照らすと、この「腹から流れ出る」という表現は肉体的にも正しいのです。聖書は2000年前に、血の源泉が「腹」にあることを示唆していたといえるでしょう。

### 2. 赤血球分化説と「血は命」

レビ記17章11節は「肉の命は血にある」と宣言しました。ヨハネ6章では、イエスが「血を飲まなければ命はない」と語られました。千島学説によれば、赤血球は万能細胞として体のすべての細胞に分化していきます。つまり血こそが体を造り、命を支える母体なのです。聖書が古代から「血＝命」と繰り返し語ってきたのは、象徴的表現ではなく、生命の実相を直観していたと考えられます。

### 3. 細胞可逆説と断食の刷新

断食のとき、分化した細胞が赤血球に戻る——これが細胞可逆説です。断食によって体はリセットされ、新しい細胞が生まれます。聖書もまた、断食を通じて人が新しくされることを語ります（イザヤ58章、マタイ4章）。古いものが壊れ、新しいものに造り替えられるという構造は、肉体的にも霊的にも共通しているのです。

### 4. 御霊・水・血の一致と生命循環

ヨハネ第一の手紙5章6～8節はこう語ります。

「あかしをするものが三つある。御霊と水と血とである。そして、この三つ

## 「のものは一致する。」

千島学説の枠組みに重ねれば、血＝赤血球（万能細胞）、水＝体液の基盤、御霊＝秩序と働きの原理。この三つが一致して命を証しするという聖書の言葉は、生命循環の実相を象徴的に言い当てています。

## 5. 贖いと血の循環

出エジプトの過越祭では、家の門に塗られた血が民を守りました。新約では、イエスの血がすべての人に救いをもたらしました。千島学説でも、赤血球は全身を巡り、すべての細胞を生かします。血は区別なく全体を潤し、命を更新します。これはまさに「普遍の救い」と重なります。

## 6. 可逆性と復活の体

細胞可逆説は、生命が「戻る」ことで再生する仕組みを明らかにしました。聖書は「古い体が壊れ、新しい体に変えられる」復活の希望を告げます。細胞の可逆性は、朽ちない体への転換の予表のようです。肉体的現象と霊的真理が同じ秩序の中で働いていることを示しているのです。

## まとめ — 聖書の先見性

千島・森下学説は現在の医学会では認められていませんが、その視点は聖書の命観と不思議なほど一致しています。血は腹から造られる（腸造血説）。血は命を生み出す万能細胞である（赤血球分化説）。血は古いものを戻して新しい命を生み出す（細胞可逆説）。そして聖書は、古代から「血＝命」「御霊・水・血の一致」「断食による刷新」「朽ちない体」という命の真理を語り続けてきました。

本シリーズは、千島・森下学説の医学的な是非を論じることを目的とせず、学説の示す命の見方が聖書の命観とどれほど深く符合するかを探求してきました。読者は各自の判断において、学説の内容を吟味してくださるよう願います。

科学と信仰は別々の領域に見えますが、根源では同じ命の奥義を照らしているのです。聖書の言葉は、現代科学をもってしてもなお解き明かされ続ける「先見の書」であるといえるでしょう。